

野鳥だより

—北海道—

ISSN 0910-2396

北海道野鳥だより第209号

編集・発行 北海道野鳥愛護会

発行年月日 2022年9月21日

カイツブリの親子



2022. 7.10 野幌森林公園

撮影者 大垣 創（江別市）



も く じ

「シマフクロウ 家族の物語」を書いて	北海学園大学教授 早矢仕 有子	2
【バードウオッチャーズ・スケッチブック】		
ハト派もタカ派も戦は辛い カワラバト(ドバト)	札幌市中央区 本間 康裕	4
【野鳥情報コーナー】		
道内初記録 積丹町で亜種シベリアアオジ	札幌市西区 北山 政人	6
道内3例目 積丹町でヨーロッパビンズイ	北海道大学農学院 千葉 利久・札幌市中央区 大町 正弘	6
【私の鳥見スタイル】		
私の陶芸と野鳥観察	札幌市南区 陶芸家 中村 裕	7
【市町村の鳥】札幌市「カッコー」		
62年前 人口50万都市のシンボルに	札幌市中央区 國本 昌秀	8
探鳥会ほうこく		10
表紙の鳥	江別市 大垣 創	15
探鳥会あんない 鳥民だより		16

※本誌に掲載する写真のカラー版は、当会ホームページ(<https://aigokai.org>)で閲覧することができます。

「シマフクロウ 家族の物語」を書いて

北海学園大学教授 早矢仕 有子



今年3月末に、北海学園大学出版会より「シマフクロウ 家族の物語」(写真1)を上梓しました。内容はタイトルのとおり、シマフクロウひと家族の32年間の歴史を観察者の立場から綴っています。

◀写真1.
シマフクロウ 家族の物語
(北海学園大学出版会
しまふくろう新書)

の上に定住性が強いと、特定の個体と長く付き合える特典もあります。私の場合、調査を始めた時点で親元に留まっていた満1歳の娘がやがて母のテリトリーを引継ぎ母となり、32才で姿を消すまでの31年間、共に年月を重ね、共に老いる贅沢な年月を過ごしました。彼女はその生涯で4羽のオスとつがいを形成し、18羽の子を育て上げました。娘や息子の中には出生地からの分散に成功し、何度も繁殖を重ねた幸運者が何羽もいます。また、彼女とつがいになったオス4羽のうち、最初の伴侶は彼女の父で、年齢を重ねた父が姿を消した後の新たなパートナーは彼女の孫でした。その次の夫だけが近親者ではない遠方からの分散個体でしたが、最後の繁殖相手は再び新たな孫でした。このような近親交配の頻発も、個体識別による長期観察があって初めて明らかにできることです。

＜1歳の娘が母となり32歳で姿を消すまで＞

主役のシマフクロウ一家と出会い、その生活史を追いつ始めたのは、私が北海道大学農学部の学部生のときでした。大阪で生まれ育ち、都会の札幌で大学生活を送った身にとって、道東内陸部の調査地はまったくの別世界で、真冬にマイナス25℃を軽く下回る厳冬と30℃を上回る真夏日が続く調査地での暮らしは、何もかも初めてのことばかりで驚きの連続でした。「住めば都」とまでは申せませんが、ヒトはたいいていの所で生きていけるものと、妙な悟りの境地を得ることはできたように思います。

毎日毎夜、その生活に密着していると、対象動物は様々な顔を見せてくれます。シマフクロウの場合、長寿

＜国の保護増殖事業 足環装着の成果＞

シマフクロウについては、1984年から国の保護増殖事業が始まり、多くの専門家と行政が協力し合って今日まで保護を進めてきました。巣立雛への足環装着による個体識別もその中心的取組のひとつです(写真2)。これまでに蓄積された生態的知見の大部分は、個体の識別無しに得ることはできませんでした。そして、保護事業開始時点で数十羽だったと推察される北海道の個体数が約170羽までに増加したのも、もちろん保護が有効に機能しているからです。写真撮影等を目的とした立入りによる攪

乱を防止するため国がシマフクロウの生息地を公開していないこともあり、保護事業の内容や成果が十分に広報されてきたとは言えません。本書ではシマフクロウ保護の歴史や取り組みについても紙数を用いて紹介することで、多くの方々に私たちが目指してきたものを知ってほしいと願っています。



写真2. 足環を装着されたシマフクロウの巣立雛

<苦難を重ねてきた活動も転換期に>

研究を始めた当初、林業者には敵対する存在とみなされていたシマフクロウが、やがて林野庁も保護事業の主体となったことで、生息地の国有林での森林管理がシマフクロウのための森づくりに大きく転換したのを目の当たりにして、一瞬にして世の中の価値観が変わることがあるということを学びました。もちろん、「一瞬」は誇張表現で、大きな変化の前には小さな兆しが現れます。そのささやかな変化にいち早く気づき先回りして転換点で流れの到来を待つあるいは呼び込むのが、研究者の役目かもしれません。でも当時の私は、高速の変化の波に付いていくだけで精一杯でした。そういった大きな転機が何度かあって、シマフクロウは少しずつ個体数を回復させてきたのです。しかし、本当に舵取りが難しいのは、個体数が増え始めたこれからです。人の手で何羽まで増やすのか、どこまで分布を拡大させるのか。これまで保護事業の中心的役割を果たしてきた巣箱と給餌をいつまでどこで続けるのか。保護増殖事業はいつ終了できるのか・・・

保護の大きな目的は、対象動物がヒトの手を借りずに自然環境の中で安定した個体群を維持できる状態を築くことです。そのためにはレッドリストの絶滅危惧ランクを下げることを目指す必要があります。しかし、レッドリストのランクダウンには関係者はとても慎重です。慎重すぎると思うこともあります。現在絶滅危惧ⅠA類のシマフクロウがⅠB、Ⅱ類・・・と危険度を下げていくのにまだどれくらい時間がかかるのでしょうか。

絶滅危惧種の保全に関わっていると、関係者だけが特権を得て生息地に自由に入り好きにだけ観察したり写真

を撮っているのはけしからん、と批判を受けることがあります。その「特権(?)」を持つことがいかに重責を負うことになるのか、この本を通してご理解いただけることを願っています。そして国の保護事業に関与する私などは、常にその責務を果たしているか自戒が必要です。研究調査から得た経験と知識を社会に還元する努力を怠ってはいけません。

ただ、保護事業開始から38年が経過した今もなお、シマフクロウの生息地情報は隠されていますし、私も自分の口から調査地名を発することはありません。そうせざるを得ない事情の切実さも、恨み節たっぷりに拙著に書き入れました。シマフクロウとの静かな時間を奪われた個人的怒りと、三十余年に渡り保護に力を尽くした多くの人々の努力を踏みにじり、一瞬でその成果を破壊することに何の躊躇もないカメラマンや自称ネイチャーガイドの行為を私は許すことができません。育雛期に営巣地に入り込んだり、採餌場所に飛来する個体に向かってストロボを連射したり、撮影のために餌付けする行為が野放しになっている現状では、まだまだ将来も引き続き生息地を隠し続けるしか無いかもしれません。一方で、生息地を隠して守ろうとする方針自体が限界を迎えていることから目をそらさず、シマフクロウの生息場所が知られていることを前提にした保全策に方向転換することも急務なのです。

<居合わせた研究者として発信を続ける>

そんな人間のドロドロ汚い話はともかくとして、この小著の主演は、もちろんシマフクロウです。理屈抜きで存在そのものが美しいシマフクロウの魅力を少しでも感じていただけたら、それだけで著者としては幸甚の至りです。学部生から今日に至るまで、研究継続を断念することなく長年シマフクロウと過ごして来られたことが本当に幸運なことだったと、今は素直に思えます。

しかし、現在、あの頃の私と同じ立場の若い学生が遠隔地で一人、絶滅危惧種の生態を研究し始めるのは、おそらく不可能に近いと思われます。三十数年前の大学、そして世の中には今よりもっと余裕があって、右も左もわからない学生が、いつ成果が出るか予測もつかない野生動物研究に足を踏み出すことを許す空気と空間が其処此処にあったと感じます。絶滅危惧種の研究を始めること自体は今でも可能ですが、そのテーマはおそらく短期で十分のデータが得られる見通しが立つ実験室での研究か、野外であっても既に先人がつけた足跡を辿って答え合わせをするような範囲に限られるでしょう。先行きを考えない愚か者には生きづらい時代になってしまいました。

だからこそ、その時にそこに居合わせた自分にしかできなかったこと、見られなかったことを積極的に発信してこの世に残していくことで、シマフクロウへの恩を少しずつでも返していきたいと思っています。

バードウォッチャーズ・スケッチブック

ハト派もタカ派も戦は辛い ^{いくさ} ^{つら} カワラバト (ドバト)

札幌市中央区 本間 康裕

いまさら言うのもなんですが、北海道野鳥愛護会の会員です。なので「野鳥を愛しているか？」と問われれば、「YES」と答えますが、「護(まも)っているか？」と聞かれれば、「？」となります。まして、「では野鳥とは？」となると、ますますもって、答えに窮します。

「野鳥というぐらいだから、野の鳥だろう」なんていうと、「じゃあ、山の鳥や海の鳥は野鳥じゃないの？」って、そうじゃなくて、「野鳥」というのは、かの中西悟堂氏の造語で、「飼育鳥」と区別した考え方だそうです。なんで、こんなことを書き始めたかという、今回取り上げるカワラバト(ドバト)は、はたして、野鳥なんですか？ あなたが札幌市の大通公園で見かけるハトの群れ、その中にトレーニングのために放された飼いはたが交じっているかも… となれば、「北海道野鳥だより」で本種を扱うのは甚だ不適当とも言えます。



黒っぽい個体 2022.5.2 知事公館庭園

まあ、難しいことを棚に上げて、話を進めれば、この鳥、日本鳥類目録第7版では「カワラバト(ドバト)」となっています。カッコつきの名前があるのは、これだけ。「フーテンの寅」こと「車寅次郎」みたいで二つ名はカッコいい～というのは別にして、カワラバトが原種ということになります。中近東原産(正確には不明)で、日本では平安時代にすでに「いへばと」として文献に登場します。いわゆる外来鳥ですね。江戸時代以前に、お寺の塔やお堂にいたので「塔鳩(たうばと)」「堂鳩(だうばと)」と呼ばれ、ドバトの名が付いたとか。原種に近い羽色のものから、黒いもの、白いものなど、さまざま個体があります。ちなみに「外来鳥ハンドブック」(文一総合出版)によれば「各国で食用とされ、日本食

品標準成分表にもその栄養についての記載がある」。ふうん、食品とみなされているんだ。

バードウォッチング大国イギリスでは人に飼われていたドバトのほかに原種のカワラバトもいるらしく、「Birdwatching」(Peter Hayman)という図鑑には両種が載っています。原種の方は英名が Rock Dove (訳せば「岩のハト」。石の多い川原のハトを連想させます)で、スコットランドの北西海岸とアイルランドの大西洋岸に分布するとあります。一方は Feral Pigeon (訳すと「野生化したハト」、野良鳩か?)で大ブリテン島などイギリス諸島で見られるとあります。



原種に近い色合いの個体 2020.4.30 知事公館庭園

原種と野良でDoveからPigeonと変わるんですね。大修館のジーニアス英和辞典によればDoveは「小形の野生ハト」、Pigeonは「飼いはた」。うーん、英語は厳密だ！で、図鑑に戻って、両種の見分け方となると… 「野良にはさまざまな羽衣があるが、原種に似ているものがある。ほとんど同一(identical)…」って、言葉が厳密に区別している割にあいまいなんですね。一応、野良の方が嘴が原種より太い(stouter)と説明がありますが、絵を見ても区別がつかないなあ。

学名はというと日本鳥類目録ではカワラバト(ドバト) *Columba livia* ですが、「外来鳥ハンドブック」では、ドバト *Columba livia var. domestica*。後半のvar. 以下は家禽の品種という意味なんだろうな。そのColumbaはラテン語で「ハト」のこと。イタリア語ではハトはColomba(女性名詞)で、復活祭のときに食べるハトの形のお菓子でもあります(食べたことがあるが、ハトというよりひし形のお菓子という感じ)。男性名詞になるとColomboになっ

て、Cristoforo Colombo (クリストフォロ・コロンボ) と
いえば、よれよれのレインコートを着た刑事じゃなくて、
アメリカ大陸をインドと誤認した人で、クリストファー
・コロンブスのほうが通りがいい (ジェノバ生まれのイ
タリア人なのになぜか英語風の名前が一般的)。

Colombaには本物のハトのことだけでなく、「ハト派」
という意味もあります。一方、「タカ派」はFalco (ファ
ルコ、つまりファルコン=ハヤブサだな) といいます。
一般にハト派は平和主義者、タカ派は主戦論者と言われ
ますが、昔の戦(いくさ)では弓矢が主要兵器。タカは尾
羽をむしろられて(殺されて)矢羽根となりました。ハトは
近代にいたるまで伝書鳩として戦いに加わりました(ま
さに戦いの一翼を担う)。第一次大戦で新兵器タンク(戦
車のこと。秘密兵器なので秘匿のため水槽「タンク」と
呼んだ)が登場したとき、無線はまだなく、連絡手段は
伝書鳩でした。でも換気の悪い車内でエンジン音や銃声
に悩まされ、いざというとき、ハトはグロッキーだった
とか(出典・平凡社カラー新書「世界の戦車」菊地晟)。
いやはやハト派もタカ派も戦争では辛い目に遭うのだな。



純白のまさに「平和の使徒」のような個体
2017.4.20 米国ハワイ・カピオラニ公園

そうは言ってもハトが平和の象徴というのは不変です。
第二次大戦後発売されたたばこ「ピース」は「平和」の
その名の通り、ハトがオリーブの小枝をくわえた図柄で
した。これ、流線形で有名なインダストリアルデザイナー、
レーモンド・ローウィの作品。旧約聖書ではノアの
箱舟から飛び立ったハトがオリーブの小枝をくわえて帰
ってきて、洪水の水が引き始めていることを知らせたと
か。それ以来、平和・平穏のシンボルなのです。

というわけで、今回ハトの話題を選んで絵を描いたの
は一日も早くウクライナに平和が訪れてほしいからです。
反戦のためにハトの絵を描くしかできないのはなんとも
悔しいですが…

最後に絵のデータ(というほどでもないが)を追記し
ておきます。

黒っぽいのは2022年5月2日、札幌市中央区の知事公
館庭園で。一瞬、「カラスバトか?」と思わせる個体で
すが、そんなことはない。首も太く、太っていて(まるで
筆者のようだ)まぎれもないドバトでした。

原種に近い羽衣の個体は、2020年4月30日に知事公館
庭園にいたもの。「えっ、20年4月といえば、コロナ禍
で知事公館庭園は閉鎖されていたんじゃないか」という
人もいらっしゃるでしょう。その通りです。閉鎖が残念
なので、塀外から観察したのですが、見えたのはドバト
だけでした。ドバトなのでFeral Pigeonと書くべきなのか
もしれませんが、日本鳥類目録では英名がRock Doveとな
っているの、それに従いました。

白い個体は2017年4月20日に米国ハワイ州はホノル
ルのカピオラニ公園で観察しました。純白で、まさに「平
和の使徒」のような姿。ハワイでは白いドバトが多く、
バードウォッチングの手引き書には「シロアジサシと誤
認しないように」と注意書きがあります。

(イラスト筆者)

いしかり調整池 環境整備報告

苗植え、花柄摘みなどを実施



環境整備活動 2022.8.31

いしかり調整池で当会は2013年から探鳥会を行っていま
す。心地よく利用できるようにと、2018年には管理者の石
狩土地改良区と確認書を交わし、花壇の整備や利用するト
イレの清掃など環境整備活動を始めました。

今年も6月22日に会員6名が参加して土を起し、土地
改良区が用意したマリーゴールド、ペチュニア、ナデシコ
などの花苗160鉢を植えました。また、毎年会員から寄贈さ
れるコスモスの苗も植えています。

7月21日には土地改良区の職員1名を含む7名で、草取
り、花柄摘み、水やり、8月31日には10名でトイレ清掃な
どを行いました。シギ・チドリの飛来が続く9~10月もき
れいな花が楽しめます。今年はこのあと3回の清掃活動な
どを予定しています。

野鳥

情報コーナー

道内初記録

積丹町で亜種シベリアアオジ

札幌市西区 北山 政人



亜種シベリアアオジ雄 2022.4.30 積丹町神岬町



亜種シベリアアオジ雌 2022.4.30 積丹町神岬町

アオジには世界中で3亜種がありますが、日本で記録があるのは2亜種です。その1つは北海道から本州中部にかけて繁殖する亜種アオジで、ごく普通に見られるものです。もう1つはロシア東部や中国北部、朝鮮半島で繁殖し、旅鳥として少数が日本海側の離島や南西諸島などで観察される亜種シベリアアオジです。こちらについては北海道ではまだ確認記録が報告されていないようですが、2022年4月30日と5月5日に、後志管内積丹町神岬町の神威岬・駐車場付近で観察しました。

4月30日には雄2羽と雌1羽、5月5日には雄1羽と雌1羽でした。雄（夏羽）の特徴は頭部の緑灰色の部分が亜種アオジよりも面積が大きく胸のあたりまでであることで、色もより一層に濃い灰色の印象を受けます。雌の特徴は亜種アオジの雌よりも全体に黄色味に乏しく、頭部が淡い色彩であることです。雌雄ともに亜種アオジよりも尾羽外側2枚の白斑の面積がかなり大きいのも特徴です。

実は2020年5月6日に当該亜種の雄とみなされる個体1羽を今回とほぼ同じ場所で見ています。その時は前から観察されていたキマユホオジロ5羽の群れや亜種アオジやカシラダカなどと共に神威岬へ向かう散策路の芝生で昆虫類の幼虫などを食べていました。これについてはまだ発表していませんでしたので、さかのぼって今回のものに加えておきます。

道内3例目

積丹町でヨーロッパビンズイ

北海道大学農学院 千葉 利久

札幌市中央区 大町 正弘



ヨーロッパビンズイ 2022.5.1 積丹町美国町

2022年4月30日から5月1日にかけて、後志管内積丹町美国町の農地でヨーロッパビンズイ1羽を観察しました。4月30日の午前7時ごろ、雪のない農地で採餌している個体を発見、観察しました。また、5月1日午前6時ごろから7時半ごろ、午後3時ごろから午後4時ごろにかけて、同一と思われる個体を同じ場所で観察しました。翌日以降は発見できず、5月1日が終認であると思われます。

この個体はビンズイに類似しますが、背のオリーブ色味が乏しく、三列風切が初列風切より突出する、眉斑が不明瞭、また目後部の耳羽にある黒色斑がない、などのビンズイとは異なる特徴が確認できます。また、嘴が同サイズの他のタヒバリ属より太く、胸から腹にかけての黒褐色で細い縦斑などの特徴から、本個体はヨーロッパビンズイであると判断しました。

観察した環境は雪が解け、土が露出した農地で、同じ場所ではツグミ、カシラダカ、アオジなどが観察されました。本個体は農地を歩きながら採餌を行っていました。ほとんど飛ぶこともなく非常に落ち着いた様子で、車内から観察する著者の近くまで来ることがあり、じっくりと観察することができました。

ヨーロッパビンズイは、国内では迷鳥として主に日本海側の離島で観察され、北海道では少なくとも利尻島において2015年春（田牧 2016）、2016年秋（先崎啓究 私信）の2例が記録されています。本報告はこれに次ぐ貴重な観察記録であり、離島を除く北海道本土では初めての記録である可能性があります。今回、観察や識別にご協力いただいた皆様に感謝申し上げます。

引用文献

田牧和広 2016. 利尻島におけるヨーロッパビンズイとコウライウグイスの観察記録. 利尻研究35:1-3.

私の鳥見スタイル

私の陶芸と野鳥観察

札幌市南区 陶芸家 中 村 裕

はじめに私と野鳥との接点である「鶴との出会い」を綴らせていただきます。

今から53年前、私が中学2年の時に友達とよく釣りに出かけていました。6月に入った日曜日の早朝、目をこすりながらも友人と待ち合わせて、自宅のオホーツク管内美幌町から隣町の女満別町（現在の大空町）まで自転車で出かけました。10kmほど国道39号線を走り、脇道に入るとそこは両側に水田が広がるのどかな田園風景です。その道をしばらく進むと網走川が見えてきます。川は穏やかに流れ、中洲にはアシが茂り川面は朝霧が漂っています。

川にかかる橋を渡りながら何気なくアシの茂みを見ると何か、かすかに動く影を感じました。欄干に足を掛け自転車を止めてしばらく見てみると、小さな赤い頭が動いています。「まさか！」狐につままれたように身動きできないほどの衝撃を覚えました。「このオホーツク地方にいないはずのタンチョウが朝霧の中から浮かび上がる！」そんな幻想的な光景が今も忘れられません。

私が陶芸の道に進み北海道の豊かな自然を表現する原点になった「鶴との出会い」です。



鶴文壺

私が野鳥に関心を持つようになったのは、陶芸の道に入り、札幌市郊外、南区の滝野に窯を持ってからです。そこは山深い森の中にあり、廃屋だった家の屋根裏にはエゾリスが巣を作っていました。家の周りからアカゲラのドラミングがこだましていました。その家に10年暮らしましたが、家も傷み子どもが小学校に入るのを期に近くの駒岡地区に引っ越しました。

子どもの入学した駒岡小学校は、札幌市に4校ある特認校のひとつで、裏山に学校林がある小さな小学校（現

在全校児童81人）です。野鳥観察が盛んで野鳥保護校の指定を受け、愛鳥活動表彰を受けた小学校でした。

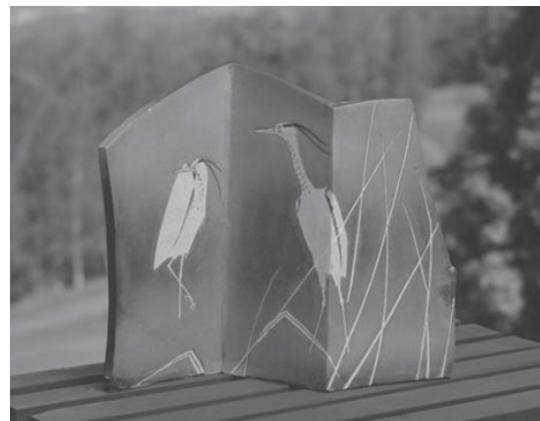


アカゲラ文陶板

当然のごとく3人の息子たちも野鳥のことに詳しくなり、家庭でも野鳥の話題が増え、鳴き声でどんな鳥かわかるまでになりました。夏休みの自由研究は、大きな画用紙にたくさんの野鳥の絵を描き、その鳥の特徴を書いた表を作り提出し、戻ってくると家の壁に貼っていました。高学年になると木を削り、色をつけバードカービングを作っていました。

私はこのような生活の中で、野鳥に自然と詳しくなっていました。私にとっての野鳥観察は、子どもたちから学んだ野鳥観察といったところです。

わが家のポストに毎年のようにシジュウカラが巣を作りヒナがかえります。先日は、家の前を流れる精進川の橋（アカゲラ橋）の下から突然アオサギが飛び立ちました。ここに住んで初めてのことです。羽音や風までも感じる近さでした。くちばしや足の黄色、羽根の青みがかったグレーが目飛び込んできました。アオサギが消えるまで空を眺めていましたが、夢のような時空間でした。鶴を見た原体験に加えて、滝野、駒岡地区での暮らしの中から野鳥をモチーフにした私の作品が生まれてきました。



アオサギ文陶屏風

（編集部より）写真は野鳥をモチーフにした筆者の作品です。作品名にある「文（もん）」は文様という意味です。

市町村の鳥

札幌市「カッコウ」

62年前 人口50万都市のシンボルに

札幌市中央区 國 本 昌 秀

＜カッコウ、カナリアと競う＞

今年8月1日に市制100周年を迎えた札幌市。そのシンボルとしての鳥はカッコウ。花はスズラン、木はライラックです。例えば地下鉄南北線幌平橋駅の1番出入口に中島公園の大きな案内板（写真1）がありますが、その裏側に紹介されています。1960年（昭和35年）に人口が50万人を突破したことを記念して制定されました。鳥・花・木それぞれ10種の候補リストが作られ、市民が葉書で投票しました。

鳥のリストを作ったのが、道庁の鳥獣行政の第一人者、後に当会副会長の斎藤春雄さん（故人）でした。リストの中に飼い鳥のカナリアが含まれていたのですが、斎藤さんは「札幌市の意向であった」と、『さっぽろ文庫 野鳥観察』（札幌市教育委員会編）に記しています。当時カナリアは市内の農家で輸出用に飼育されていたり、中心部の商業地域には今も続く同名の店舗がありました。ということもあってか、カナリアは商店街の人からの投票が多かったといえます。斎藤さんはそれでも差を付けてカッコウが選ばれて「ほっとした」と気持ちを明かしています。



写真1. 中島公園案内板裏に記されたカッコウ

＜札幌の初鳴きは給料日のころ＞

『さっぽろ文庫 野鳥観察』は平成5年（1993年）発行ですが、斎藤さんは「カッコウの声は札幌の郊外であれば聞こえるが、市街地では聞こえなくなった」と書いています。同書には、当会会員でエコ・ネットワーク代表の小川巖さんの記述もあります。「昭和45年（1970年）ごろまで北大キャンパス内でカッコウに托卵されたモズの巣をいくつも見つけた」、「昭和55年（1980年）ごろまでなら北大植物園、北大構内で鳴き声を聞いたものだ」と述懐しています。

当会2代目の会長を務めた井上元則さん（故人）は大正末から終戦直後にかけて道職員でしたが、毎年5月21日がカッコウの初鳴きであり、それは道庁の給料日なのでよく覚えていると、その著書『北海道の自然1 野鳥』（北海道新聞社）に書いています。小川巖さんも「初鳴きは5月20日前後と決まっていたが、それがどんどん遅くなっているのは、個体数が減って聞くチャンスが減ったせいだろう」（さっぽろ文庫 野鳥観察）と考察しています。

日々、この原稿執筆のことを考えていたら、偶然にも意匠化されたカッコウに出会いました。中央区の中島公園と渡辺淳一文学館がある住宅街の間を流れる鴨々川の柵に彫られたカッコウ（写真2）、スズラン、ライラックが順繰りに並んでいるのです。歩きながらカッコウを数えたら中州1号橋から中島橋まで26羽もいました。中村草田男の名句「降る雪や明治は遠くなりにはけり」を本歌取りして、「郭公や昭和は遠くなりにはけり」と感慨にふける散策となりました。



写真2. 柵にカッコウの意匠（中央区・鴨々川）

＜日本野鳥の会札幌支部報「カッコウ」＞

さてカッコウと言えば日本野鳥の会札幌支部報名が「カッコウ」です。手書きガリ版刷りの創刊号に発行は昭和53年（1978年）4月とあります。先述の小川巖さんの記述によると、まだ北大構内でカッコウの鳴き声が聞こえていたころです。よく見ると創刊号の題字は現在の「カッコウ」ではなく平仮名の「かっこう」（写真3）です。



写真3. 日本野鳥の会札幌支部報・創刊号の題字

編集者は北大・大学院生の城殿（しろとの）博さん。「支部報名を自分が独断で決めてしまったことについては、後日申し開きをします」と編集後記にあるのですが、まもなく城殿さんは青年海外協力隊員としてパラグアイに赴き、「かっこう」と名付けた本意は支部報で語られることはありませんでした。推測するに、札幌市の鳥であること、城殿さんが農学部応用動物教室で草原性の野鳥を研究していたことに関連があるのかもしれませんが。

この創刊号で松井繁副支部長（故人）は、樺太（サハリン）の豊原（現ウジノサハリンスク）にあった旧樺太医学専門学校在学中の昭和19年（1944年）5月18日の早朝、カッコウの初鳴きを聞いたと、懐かしんでいます。サハリンも北海道も初鳴きの時期は概ね同じだったのです。「かっこう」が現支部報名の「カッコウ」になったのは創刊

から6年後の 昭和59年(1984年)4月1日発行の第28号からです。事務局だよりには、「新年度に合わせて心機一転」とだけ記されていますが、標準和名に用いられる片仮名に合わせたのかなと推測します。

＜今、札幌のカッコウは＞

日本野鳥の会札幌支部では毎年6月中旬の3日間、会員によるカッコウの定点調査を行っています。エリアは札幌市10区を中心に、石狩市、江別市、北広島市の全50か所で、近年では2012年の77羽をピークに減少傾向で、2018年は60羽、19年は45羽でした。コロナ禍で2年間の休止を経て、今年の記録は41羽。詳しくは「カッコウ」の11-12月号に掲載されます。

今年の当会の探鳥会では6月4日北区・茨戸川緑地、5日苫小牧市・植苗ウツナイ、12日東区・厚別川、26日東区・福移で記録されました。私は4日の茨戸川緑地探鳥会には欠席でしたので、本稿用の写真を撮ろうと11日にひとりで行ってきました。あちこちで鳴いていて、移動もしているようです。電線に何度か止まった個体(写真4)は托卵を警戒するノビタキとバトルを繰り返していました。



写真4. カッコウ 2022.6.11 茨戸川緑地

札幌市の鳥カッコウ。郊外では健在のようですが、市街地に近いところで鳴くのは過ぎし日のことと思っていました。そんなとき、新聞記者(当時)の小野高秀さんが北大キャンパスの第1農場で「カッコウが鳴いていた」と個人のfacebookに動画(写真5)をアップしていたのです。日時は6月5日午前6時ごろ。確かに初夏の爽やかな農場にカッコウの声が高らかに響いています。ポプラ並木が美しい第1農場は概ね北13条から15条周辺に位置するのでしょうか。小野さんに問い合わせましたら、声は農場内ではなくもう少し北の奥の方から聞こえてきたようです。

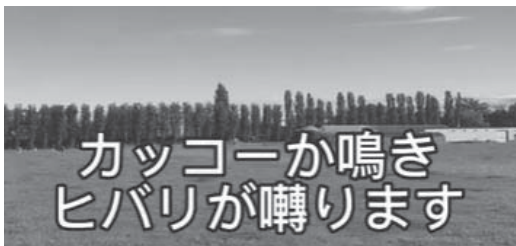


写真5. 北大第1農場(小野高秀さんのfacebookから)

それにしても、札幌の中心部に近いところに、今もカッコウが来るのだと少し驚きました。そこで北大野鳥研究会の千葉利久さんに聞いてみると、「北大では1998年から長期間記録がなく、近年では2019年6月に北22条付近で夜間に1回の鳴き声の記録がある」とのことです。さらに千葉さんの友人が今年6月5日から1週間ほど、

カッコウを聞いていて、場所は北18条付近にある陸上競技場北側(ほぼエルムトンネル上)と北キャンパス(北20条~24条)だったとのこと。これは小野さんが6月5日に聞いたカッコウと同一個体の可能性があります。

大空に幹を連ねるポプラ並木を背景に、カッコウの声を聞く。北大に今もそのような環境が残っていることを知り得ました。北大寮歌は多数ありますが、昭和3年(1928年)寮歌のタイトルは「郭公の声に」です。最初のフレーズは「郭公の声に迷夢の夜は明けて」。しらじらとした北大に鳴くカッコウが歌われています。

＜文学の中に鳴く札幌のカッコウ＞

北大の寮歌に歌われているなら、小説の中でカッコウは鳴いていないでしょうか。道立文学館副館長の野村六三さんに聞いたところ『苺畑を永遠に』を勧めてくれました。偶然なことに、舞台はこちらも北大です。日本野鳥の会会員で芥川賞作家・加藤幸子氏が北大農学部園芸学教室の学生であった自身をモデルにした小説です。

「大学農場の境にある防風林にカッコウが渡ってきた。そのほからかな鳴き声は、澄んだ大気を窓ガラスを突き破るように駆けぬけてくると、彼女の苺畑にシャワーになって降りそそいだ」

舞台は 昭和30年代初め(1950年代後半)の北大です。実際に作者はイチゴ栽培の研究をしていました。「カッコウと北大」、短歌や俳句ではどうでしょうか。

春^{にれ}楡^{ひる}の午の林に入りくればこゑもの憂くて郭公鳥啼く
(宮 柊二)

学園や郭公楡をくぐり飛ぶ(水原秋桜子)

カッコウの鳴き声は北都の風土によく似合います。札幌市内にカッコウを詠んだ句碑がないかと気にしていたら、豊平区の月寒公園にありました。キタキツネの写真を撮りに行ったところ、巡り合ったのです。(写真6)

開拓や斧よ木霊よ遠郭公(北 光星)

農村部から月寒公園の近隣に居を移した北 光星が、開拓者の営みを朗々と詠んだ一句です。



写真6. 北 光星の句碑(豊平区・月寒公園)

各地に伝わる「カッコウが鳴いたら豆をまけ」。そのころになるとは霜の心配もないことから、農事の始まりを告げる言い伝えです。札幌市のほかにカッコウが市町村の鳥になっているのは、十勝管内の士幌町、上士幌町、鹿追町、芽室町、オホーツク管内の雄武町、空知管内の長沼町と深川市です。先人が拓いた大地と共にわが胸も高鳴る、そんな心象にカッコウの鳴き声はぴったりです。



茨戸川緑地の「お試し探鳥会」を初めて実施。3年ぶりの植苗ウトナイは草原の灌木林化が進んでいました。7月の野幌森林公園から参加者が名札を付けることを再開しました。

藤 の 沢

2022. 5. 5

札幌市豊平区 鳥谷峰 とやみね 心 こころ (小学6年)

車から降りたら、すぐに鳥の音が。
会が始まって少しすると、ホオジロが！初ホオジロです。
「よーし、写真におさめるぞー！」と興ふん気味。
「やったー！写真におさめられた！」と写真の確認。すると、背中しか撮れていませんでした。「ま、見られて良かったー。また見られるといいな」と思いました。

どんとんと山の方に行くと、花が沢山咲いていました。
「きれいだなー」思っていると、急にガケが！
「怖っ！」ゆっくりゆっくり歩きます。

ガケを進み小学校で休けいをして川の方へ。すると、オオルリが！すぐに飛んでしまいましたが、きれいな青色が見えてとてもうれしかったです。

その先に進み、住宅街へ。すると、またまたホオジロ！2回目です。「やったー！」今度はとても良い所にて、写真をきれいに撮ることが出来ました。感激しました。



ホオジロ 筆者撮影

その後、田畑へ行きました。「何かいるかなー？」と思っていたら、ニュウナイスズメ。カワラヒワも。加えて、キジバト。「あまり見ない鳥が出てくれば良いな」と思っていたら、モズ！

「わー！早く撮らなければ！」と大忙し。
パシャ！「撮ったぞー！」

とよろこんでいたのですが…確認すると、撮れてない！
「えー！（泣）」となりました…。撮るしゅん間飛んで行ってしまったのです。ですが、オオルリ、ホオジロ、モズといった、あまり見たことのない鳥が見られて良かったです。また、北海道野鳥愛護会の探鳥会に参加したいです。

【記録された鳥】マガモ、キジバト、アオサギ、コゲラ、アカゲラ、モズ、カケス、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ハシブトガラ、ヤマガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヒヨドリ、ウグイス、ヤブサメ、センダイムシクイ、ゴジュウカラ、オオルリ、ニュウナイスズメ、スズメ、ハクセキレイ、カワラヒワ、マヒワ、ホオジロ、カシラダカ、アオジ
以上27種

【参加者】板谷輝美、大西智子、鎌田要子、川端 純、菊池文子、國本昌秀、小島俊幸、小林 恵、小堀煌治、小谷内久江、漆崎 修・美枝子、品川睦生、杉山次郎、高木麻里子、高島 均・明美、竹田芳範、辰巳研一・昌江、田守真一・敦子、辻 祥子、辻 雅司・方子、辻 由美、鳥谷峰 修・由紀・心、中村俊太郎、中村 隆、畑 正輔、八戸 寛、早坂泰夫、萬谷慎太郎・利久子、樋口孝城、藤吉 功、本間康裕、丸島道子、南 貴和子、森本玲子
以上42名

【担当幹事】小堀煌治、中村 隆

野 幌 森 林 公 園

2022. 5. 8

オオルリは確認できませんでしたが、キビタキの姿が見られました。圧巻だったのはクマゲラが出たこと、それも2回、3回と。ツツドリがシーズン初見の幸運でしたが、クマゲラの迫力に押されてしまいました。



ツツドリ 中村 隆さん撮影

【記録された鳥】オシドリ、マガモ、キンクロハジロ、カイツブリ、キジバト、ツツドリ、コゲラ、オオアカゲラ、アカゲラ、クマゲラ、ヤマゲラ、ハシブトガラス、ハシブトガラ、ヤマガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヒヨドリ、ウグイス、ヤブサメ、センダイムシクイ、メジロ、ゴジュウカラ、キバシリ、クロツグミ、キビタキ、ニュウナイスズメ、カワラヒワ、アオジ
以上28種

【参加者】今村三枝子、大表順子、小原正徳、蔵谷徳洋、栗林宏三、斉藤一史・亜矢子、佐川健次、品川睦生、杉山次郎、高橋貞夫、高橋利道、鳥谷峰 修・心、長野隆行、中村 隆、蓮井 肇・敏恵、畑 正輔、早坂泰夫、樋口孝城、福士一徳、辺見敦子、細川 望、松原寛直、丸島道子、

南 貴和子、横山加奈子、吉田慶子
【担当幹事】畑 正輔、横山加奈子

以上29名

千 歳 川

2022. 5. 15

札幌市厚別区 石塚 肇



ヤマセミ 安倍 隆さん撮影

愛護会に入会し3年目で初めて千歳川の探鳥会に参加いたしました。晴天無風の中、遅咲きの桜に見守られながらの鳥見は感動の連続でした。

私は60歳で妻と入会しました。それまで、いわゆるバードウォッチングの経験は二人とも全くありませんでした。定年となり時間にも余裕が出てきたときに、野幌森林公園での探鳥会の案内を拝見し、病気のリハビリを兼ね参加しました。バードウォッチングを趣味とする人は自分とは違う世界を生きる人ぐらいに思っていた私は、初めて参加した探鳥会で知識豊富な会の幹事の方の親切な説明をいただき、シジュウカラのネクタイを知り、キバシリの木の幹を歩く姿を知り、参加されていた方のやさしさを感じました。早速、入会させていただきすぐに双眼鏡を購入し、古い野鳥図鑑を本棚から見つけ出し、それ以降は探鳥会に参加できることが夫婦二人の楽しみとなりました。

今回の千歳川は妻がオオルリを見られるかもしれないと前日から期待満々で、早起きをして、そそくさと現地に向かいました。さけます情報館付近の公園駐車場からいざ出発し、上流のダムを目指しました。千歳川のせせらぎと様々な野鳥の鳴き声を聞きながら緩い山道を歩き、一緒にベテランの方からエナガ、アカゲラ、センダイムシクイ、キビタキ、アオジなど次々と声が上がり、双眼鏡を向ける人、スナイパーのごとく写真を撮る人が皆一斉に同じ方向を向いていました。途中、ヤマセミの飛ぶ姿も見られ興奮覚めやらないまま疲れも感じずゴールのダムに到着しました。

帰りの道程で期待していたオオルリやたくさんの野鳥を観察することができ、さらに、まもなく駐車場に着こうかというときにはイカルが集団も現れ、大変思い出深く充実した探鳥会となりました。企画していただいた役員の方々、参加者の皆様に心から感謝申し上げます。

【記録された鳥】ヒドリガモ、カルガモ、キンクロハジロ、キジバト、アオサギ、ツツドリ、トビ、ヤマセミ、コゲラ、オオアカゲラ、アカゲラ、ハシブトガラス、ハシブトガラ、ヤマガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヒヨドリ、ウグイス、ヤブサメ、エナガ、センダイムシクイ、ゴジュウカラ、キバシリ、クロツグミ、コサメビタキ、キビタキ、オオルリ、ニュウナイスズメ、キセキレイ、ハクセキレイ、セグロセキレイ、カワラヒワ、マヒワ、イカル、アオジ

以上35種

【参加者】安倍 隆、石塚 肇・鈴子、今村三枝子、岩井幸子、大表順子、奥村奈緒子、尾崎真大・文乃、川端純、栗林宏三、小島俊幸、斉藤一史・亜矢子、佐藤香織、佐川健次、杉山次郎、高島 均・明美、高月大助・真由美、田口麻衣子、竹田芳範、辻 雅司・方子、鳥谷峰修・由紀・心、畑 正輔、早坂泰夫・みどり、萬谷慎太郎・利久子、平澤路生、南 貴和子、武藤幹太、吉田慶子

以上37名

【担当幹事】栗林宏三、早坂泰夫

鵲 川 河 口

2022. 5. 22

遠くに8羽のチュウシャクシギ、参加者全員で見ることができました。シギ・チドリ類ではキアシシギも見られました。牧場の中を通る道からは、コヨシキリ、ノビタキなど草原の鳥を観察しました。



チュウシャクシギ 早坂泰夫さん撮影

【記録された鳥】キジ、ヒドリガモ、マガモ、カルガモ、ハシビロガモ、カワウ、アオサギ、チュウシャクシギ、キアシシギ、オオセグロカモメ、トビ、オジロワシ、ハシブソガラス、ハシブトガラス、ヒバリ、ツバメ、ウグイス、センダイムシクイ、オオヨシキリ、コヨシキリ、ノビタキ、スズメ、カワラヒワ、ホオアカ、アオジ、オオジュリン

以上26種

【参加者】白田 正、大垣 創、門村徳男、北山政人、小林敦実・恵、佐藤直樹・直実、高島 均、田口麻衣子、辻 雅司・方子、坪田亜希子、鳥谷峰 修・由紀・心、畑 正輔、早坂泰夫、南 貴和子、鷺田善幸

以上20名

【担当幹事】白田 正、門村徳男

【早朝探鳥会】 野 幌 森 林 公 園

2022. 5. 29

札幌市厚別区 早坂 泰夫



オシドリのがい ここエゾセンニュウの鳴き声
中村 隆さん撮影

新型コロナの影響で3年ぶりの実施となった早朝探鳥会。やや風が強く肌寒かったものの、雨は上がりました。開始直後からキビタキ、クロツグミ、センダイムシクイ、ウグイスなど、この森で出会えそうな夏鳥たちの囀りが響き渡りました。ツツドリ、さらには「キーコーキー」とイカルの特徴ある声も確認できました。早朝探鳥会は、早朝ならではの清々しさを感じながら探鳥のできるいい時間です。しかし、木々の葉も生い茂り、なかなか鳥の姿を見つけることが難しい時期にもなってきました。何とかヤマガラ、キビタキ、センダイムシクイなどを見つけましたが、動きが素早く、望遠鏡には入れることが出来ず、つつい探す時間が長くなってしまいました。

大沢の池でオシドリ、マガモ、カイツブリを観察している時、突然、池の西側の湿地帯の方から「ジョッピンカケタカ」の音が数回聞こえました。エゾセンニュウです。担当幹事の富川さんと顔を見合わせました。野鳥愛護会52年の歴史の中で、野幌森林公園探鳥会での初記録です。エゾセンニュウは北海道にも渡来する夏鳥ですので、それほど珍しい鳥ではありませんが、その鳴き声「ジョッピンカケタカ」の「ジョッピン」は北海道弁では、出入り口の鍵を言い表す言葉。朝夕夜と、鳴き続ける声は「ジョッピンカケタカ＝玄関の鍵をかけたか」という防犯を呼びかける鳴き声として親しまれてきました。しかし、その姿を見つけることは至難の業で、私もこれまでに1度だけ道南の八雲町で灌木の藪の中をかすかに動いたところを確認した程度です。漢字表記で「蝦夷仙入」ですが「蝦夷潜入」（藪の中に潜って身を隠す）と表記したいところです。

野幌で鳥類標識調査をしている富川さんによると、エゾセンニュウはこれまでの鳥類標識調査で春と秋に9回確認していますが、森の中での確認は珍しく渡り途中の通過個体ではないかということです。声だけでしたが嬉しい成果

です。

4月から再開している探鳥会ですが、新型コロナの感染状況が落ち着きこれまで同様、参加者の皆さんと楽しく探鳥会を続けられること願ってやみません。

【記録された鳥】オシドリ、マガモ、キンクロハジロ、カイツブリ、キジバト、ツツドリ、トビ、コゲラ、アカゲラ、ヤマゲラ、ハシブトガラス、ハシブトガラ、ヤマガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヒヨドリ、ウグイス、ヤブサメ、センダイムシクイ、エゾセンニュウ、ゴジュウカラ、クロツグミ、キビタキ、オオルリ、カワラヒワ、イカル、アオジ

以上27種

【参加者】今村三枝子、大橋路子、辻 雅司・方子、富川徹、中村 隆、畑 正輔、早坂泰夫、平原雄一・栄子、福士一徳、水沼靖陽、南 貴和子、森田康志、山本 将・蓉子、吉田慶子

以上17名

【担当幹事】富川 徹、早坂泰夫

【お試し探鳥会】 茨 戸 川 緑 地

2022. 6. 4



ベニマシコ 辻 雅司さん撮影

初めて実現した茨戸川緑地でのお試し探鳥会。草原の鳥が勢ぞろいで、あちこちから鳴き声が聞こえてきました。お目当てのベニマシコも全員で見ることができました。記録31種は環境の多様性も物語っています。

【記録された鳥】マガモ、カルガモ、キジバト、アオサギ、カッコウ、オオセグロカモメ、トビ、オジロワシ、チュウビ、アリスイ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ハシブトガラ、シジュウカラ、ヒバリ、ヒヨドリ、ウグイス、エゾセンニュウ、オオヨシキリ、コヨシキリ、ムクドリ、コムクドリ、ノビタキ、ニュウナイスズメ、スズメ、ハクセキレイ、カワラヒワ、ベニマシコ、ホオアカ、アオジ、オオジュリン

以上31種

【参加者】今村三枝子、岩井幸子、大西智子、河合千賀子、佐藤香織、高井さつき、辻 雅司・方子、出口悦子、道場 優、畑 正輔、早坂泰夫、福士一徳、福島 文、本間康裕、南 貴和子、本杉政司・朋子、横山加奈子、吉田慶子、吉見孝夫・紫乃

以上22名

【担当幹事】 早坂泰夫、横山加奈子

植 苗 ウ ト ナ イ

2022. 6. 5

札幌市西区 丸勢 文現

数年前に宮島沼でマガンを見ていた時に初めて探鳥会に参加しました。その後も時々参加、鳥見初心者の僕と妻には大変勉強になる貴重な探鳥会です。

今回は植苗ということで、初めて訪れる探鳥地です。どんな鳥に会えるか前日からワクワクします。当日は、曇りがちで寒かった日々とは一転して、初夏の気持ちのいい日差しに恵まれました。集合場所で会員さんにルートを聞くと、ここは穴場なんだけど、ここ3年は探鳥会を実施できなかったで現場はどうなってるかわからず、かなり荒れてる気もする、とのことでした。

歩き始めて、さっそく、カワラヒワ、シジュウカラ、ハシブトガラ、姿は見えませんがカッコウ、ウグイス、色々な鳥の音が賑やかで、いい気分です歩いて行きます。

森を抜けると草原のはずですが、低灌木に覆われてやはり以前とは状況が変わっているとのことでした。以前はシマアオジ、ベニマシコなど多種の野鳥を見られたそうで、残念でした。ウトナイ湖畔から美々川まで行ってみました、途中の道も廃道化していました。



低灌木に覆われたかつての“草原”

環境変化は人為的なのか、自然現象なのかわかりませんが、乾燥化してヨシ原がなくなり見られる鳥も居なくなったのではないかと説明でした。美々川を下るカヌーの方々の話では、上流に施設ができてから著しく水質も悪化したそうで、ヨシ原の減少が人為的なものではなればよいな、と思いました。

ウトナイ湖畔の広場で鳥合わせをすることになり、次々と名前があげられて。ベニマシコ出たの?!ホオアカも?!という声が上がります。鳥を見るのも楽しいし、鳥合わせも楽しいひとときです。やはり、妻と二人だけの鳥見とは違って、20人の目があちこち探すので確認できる鳥の数も多いんだな、と思いました。

鳥合わせ前にチュウヒとオジロワシを確認していたのですが、やがて空中戦となりました。見応えがあって、しばらくみんなで観察しました。植苗探鳥会の最後の締めによく、いい気分でした。



チュウヒとオジロワシ(下)の“空中戦” 早坂泰夫さん撮影

【記録された鳥】 アオサギ、ツツドリ、カッコウ、オオジシギ、トビ、オジロワシ、チュウヒ、コゲラ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ハシブトガラ、シジュウカラ、ヒバリ、ヒヨドリ、ウグイス、ヤブサメ、オオムシクイ、センダイムシクイ、クロツグミ、ノビタキ、キビタキ、スズメ、ビンズイ、カワラヒワ、ベニマシコ、ホオアカ、アオジ

以上27種

【参加者】 石塚 肇、市橋栄二、大表順子、大垣 創、太田聡美、奥山博美、川端 純、菊池文子、小林敦実・恵、斎野伊知郎、佐川建次、新城 久、鈴木恵子、高沢理一・淳子、辻 雅司・方子、中村千恵子、西田 都、畑 正輔、早坂泰夫、平澤路生、丸島道子、丸勢文現・亜希子、南 貴和子、森本玲子、鷺田善幸

以上29名

【担当幹事】 畑 正輔、鷺田善幸

厚 別 川

2022. 6. 12

札幌市南区 萬谷 慎太郎

「厚別川の堤防を歩きます。カッコウの鳴き声や姿も期待できます」一案内にはこう書かれていました。カッコウの声は久しく聞いていません。姿は見たこともありません。だったら行くしかない、ということで厚別川の探鳥会に参加しました。

河川敷には野鳥たちの賑やかな声が響きます。すばしっこく飛び回る姿も見られます。やがて「ノビタキがいました」との声。しかし双眼鏡で捉えるのは難しい。必死で探す。いない。どこだ?…やっと見つけます。が、あれ?ノビタキって黒かったっけ?私の知るノビタキは茶色っぽかったはず。後で調べるとオスは夏と秋で全身の羽毛が劇的に生え変わること。なるほど。オスとメスで姿形が全く違う鳥もいますが、同じ個体でも変身するのですね。野鳥の見分けは難しい。

つづいて「オオヨシキリです」の声。私は初めて見る鳥です。河川敷が騒がしいのはコイツのせいでした。とにかく口を大きく開けて鳴く。まるで怒っているよう。が、とどまる時間が長いので観察には好都合でした。ほかにもアオジ、ホオアカ、モズ、コムクドリなどこの日は20種類の野鳥を観察できました。



オオヨシキリ 中村 隆さん撮影

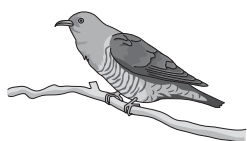
さてお目当てのカッコウ。姿を見た人もいたが私は確認できませんでした。しかしすぐそばの林から「♪カッコウ」の響き。こんな近くで聞くのは記憶にないほど久しぶりです。さらに「♪ビビビビ…」と聞き慣れない声も。これは雌と思われるとのこと。そうか、「♪カッコウ」と鳴くのは雄だけなのか。こうした豆知識を得るのも観察会の楽しみです。カッコウは他の鳥の巣に卵を産み落とすことで知られます。調べるとその相手先はノビタキ、オオヨシキリ、アオジなど。ん？これって今日、見た鳥ばかりだよな…そうか、だから厚別川の河川敷にはカッコウがいるのか…妙に納得した探鳥会でした。

【記録された鳥】 マガモ、キジバト、アオサギ、カッコウ、トビ、アリスイ、アカゲラ、モズ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ハシブトガラ、ヒヨドリ、エゾセンニュウ、オオヨシキリ、コムクドリ、ノビタキ、スズメ、カララヒワ、ホオアカ、アオジ 以上20種

【参加者】市橋栄二、井上 剛、今村三枝子、大表順子、大西智子、鎌田要子、栗林宏三、小西美美枝、小嶋俊幸、小林敦実・恵、佐川健次、佐藤 勉、佐野純子、高島 均、辻 祥子、辻 雅司・方子、辻 由美、天崎比良子、鳥谷峰 修・由紀・心、中村 隆、畑 正輔、早坂泰夫、萬谷慎太郎・利久子、樋口孝城、福江 恵、福士一徳、本間康裕、南 貴和子、武藤幹太・大翔、村田睦子、山本育子

以上37名

【担当幹事】中村 隆、早坂泰夫



野 幌 森 林 公 園

2022. 6. 19



カワセミ 早坂泰夫さん撮影

心配された雨はばらつく程度、エゾハルゼミがしばらく鳴かなかったので鳥の音が楽しめました。大沢の池でカワセミを全員で観察できました。

【記録された鳥】 オシドリ、キンクロハジロ、カイツブリ、キジバト、アオバト、ツツドリ、カワセミ、コゲラ、アカゲラ、ハシブトガラス、ハシブトガラ、シジュウカラ、ヒヨドリ、ウグイス、ヤブサメ、センダイムシクイ、ゴジュウカラ、クロツグミ、キビタキ、アオジ 以上20種

【参加者】市橋栄二、今村三枝子、大表順子、大西智子、数田真弓、鎌田要子、蔵谷徳洋、小西美美枝、小嶋俊幸、佐川健次、辻 雅司、鳥谷峰 修・心、成田光子、畑 正輔、早坂泰夫、樋口孝城、福士一徳、辺見敦子、松原寛直・敏子、南 貴和子、本杉政司・朋子、横山加奈子、吉田慶子 以上26名

【担当幹事】畑 正輔、横山加奈子

福 移

2022. 6. 26

札幌市清田区 長瀬 眞央

私の野鳥観察歴はまだ1年半に満たないのですが、そのような中で初めて参加した探鳥会が、当会の野幌森林公園での探鳥会(2021年10月)でした。その後は新型コロナの再拡大から、図鑑を片手に単独活動の日々が続いていましたが、最近では規制も緩和され、札幌でも様々なイベントが開催されるようになってきました。そして、今回、私自身の自粛生活もそろそろいいかな・・・ということで、2回目の探鳥会参加となった次第です。

さて、前置きが長くなりましたが、今回は石狩川河川敷とその周辺の耕作地等に生息する草原性の野鳥達を観察できるということで、前回の野幌森林公園とはまた違った環境が楽しめそうだと思います、参加を決めました。

いざ、目的地に向かって歩きながら観察を始めると草原性の野鳥たちは、とてもよく囀ってくれますが、なかなか

その姿を見せてくれません。別の参加者の方の「あ、いた!」という声に誘われて、その方向を双眼鏡で一生懸命に観察するのですが、見つけても遙か先の支柱の先端や葦の穂影であったり・・・非常に見つけ難く、しかも遠い!!

すぐ目の前の梢に姿を現してくれる野幌森林公園のシジュウカラやヒガラ、メジロなどとは同じくらいの大きさのノビタキやオオジュリンなども見え方がまるで違います。でも、外敵から身を守るには見つかりにくいことはとても重要です、遠くから脅かさないように静かに観察することも大切ですので、そのような状況下でも楽しめる観察眼を養っていかなければならないと思いました。

そして、もう一つ。あたりまえの話かも知れませんが、野鳥観察は「姿」で見分けるだけでなく、「生息環境」や「季節」で絞り込み、「囀り」で聞き分けるといったことの重要性もあらためて感じ、学ぶことができました。

このようなことから、まずは次回までに野鳥アプリでお気に入りの野鳥について「囀り」の特徴を覚え、姿が見えなくても今以上に楽しめる力を少しずつ身に付けていきたいと思います。



ノビタキ 早坂泰夫さん撮影

【記録された鳥】キジバト、アオサギ、カッコウ、トビ、オジロワシ、モズ、ハシボソガラス、ヒバリ、ヒヨドリ、ウグイス、シマセンニュウ、エゾセンニュウ、コヨシキリ、ムクドリ、コムクドリ、ノビタキ、ニュウナイスズメ、スズメ、ハクセキレイ、カワラヒワ、ベニマシコ、ホオアカ、アオジ、オオジュリン 以上24種

【参加者】石塚 肇・鈴子、今村三枝子、大西智子、川端純、栗林宏三、小林敦実・恵、小谷内久江、佐川建次、佐

野純子、杉山次郎、高橋貞夫、辻 雅司、道場 優、鳥谷峰 修・心、長瀬真央、西窪翠子、畑 正輔、早坂泰夫、原 美保、丸勢文現・亜希子、武藤幹太・大翔、村田睦子、本杉政司・朋子、横山加奈子 以上30名

【担当幹事】辻 雅司、原 美保

野 幌 森 林 公 園

2022. 7. 10



参加者の名札を付けることを再開した探鳥会

カラ類の幼鳥が見られたほか、大沢の池でカイツブリの雛が親の背中に乗っているシーン（写真：表紙の鳥）が楽しめました。この日から参加者の交流促進を目的に名札を付けることを再開、皆さんは帽子や胸に付けていました。手指消毒や名札の衛生管理を徹底して実施していきます。

【記録された鳥】カルガモ、カイツブリ、キジバト、アオバト、ツツドリ、カワセミ、コゲラ、アカゲラ、ハシブトガラス、ハシブトガラ、ヤマガラ、シジュウカラ、ヒヨドリ、ウグイス、ヤブサメ、センダイムシクイ、メジロ、ゴジュウカラ、クロツグミ、キビタキ、オオルリ、カワラヒワ、アオジ 以上23種

【参加者】会川 隆、青木あけみ、市橋栄二、大垣 創、川端 純、黒滝則雄・健介、小西英美枝、佐藤直樹、佐藤直美、杉山次郎、高橋貞夫、谷内孝之・裕子、辻 雅司、坪田亜希子、道場 優、中村 隆、畑 正輔、早坂泰夫、辺見敦子、南 貴和子、山本育子、横山加奈子、吉田慶子 以上25名

【担当幹事】中村 隆、早坂泰夫

表紙の鳥

カイツブリの親子



7月10日の愛護会の野幌森林公園探鳥会に参加したときの写真です。皆さんと、定例コースの大沢の池まで行ったところ、池の中心付近の水草の間を1羽のカイツブリが泳いでいました。

肉眼では豆粒大の大きさ。よく観察すると雛3羽を背中に乗せているのです。雛たちの表情はウトウトしていて気持ち良さそうにしていました。ざわざわとした世相の中、つい思わず心が「ホッ」とする瞬間になりました。

大垣 創（江別市）



マスク着用など新型コロナウイルス感染症防止対策を行って活動しています。状況により中止の場合がありますので、実施の有無は、前日夜に当会ホームページでご確認ください。

【いしかり調整池】2022年10月1日(土)

※土曜日の開催です。ご注意ください。

この時期、いしかり調整池にやって来るシギ・チドリのほか、ガン・カモ、サギ類などの水鳥を主に観察します。また、水鳥たちを狙って猛禽類もやってきます。11:30ごろ鳥合わせを行い、解散となります。

集 合：いしかり調整池駐車場 9:30

交 通：公共の交通機関はありません。

【野幌森林公園】2022年10月9日(日)、11月6日(日)、
12月4日(日)

紅葉の秋から冬に向かう野幌森林公園を楽しみます。夏鳥はほとんど去り、カラ類やキツツキ類などが主になりますが、ツグミやマヒワ、レンジャク類などの冬鳥が訪れる時期となり、春や夏とは違った趣があります。12:00までに大沢口へ戻り、鳥合わせをして解散となります。(午前日程で終わられるようコースを変更する場合があります)

集 合：野幌森林公園大沢口 9:00

交 通：JRバス 新札幌駅発(文京台循環線)

「文京台南町」下車 徒歩10分

【測量山唐松平】2022年10月16日(日)

室蘭測量山直下の唐松平で、主にハイタカ、オオタカ、ノスリなどのタカ類の渡りを楽しみます。タカ類の観察は晴天が必須条件ですが、ここでは、タカ類以外の鳥たちも観察することができます。11:30ごろの鳥合わせの後は解散になりますが、引き続き探鳥を楽しむこともできます。

集 合：測量山唐松平 9:30

交 通：公共の交通機関はありません。

JR室蘭駅からタクシー利用可能

【ウトナイ湖】2022年11月13日(日)

晩秋のウトナイ湖にはこれから南に渡ったり、近郊で越冬したりするハクチョウ類、カモ類が見られます。渡り途中のマガンやヒシクイなども見られます。これら水鳥類の観察を主体に湖畔をネイチャーセンターまで歩きます。12:00ごろネイチャーセンターの駐車場で鳥合わせをして解散となります。

集 合：野生鳥獣保護センター前 9:30

交 通：道南バス 新千歳空港発(苫小牧行)

「ウトナイ湖」下車 徒歩5分

☆雨具、観察用具、筆記用具などお持ちください。

☆悪天候で中止の場合があります。

☆問い合わせ 北海道自然保護協会 011-876-8546
10:00~16:00 (土日、祝祭日を除く)

鳥 民 だ よ り

◆会員・大垣 創さんの野鳥写真展 開催中◆



キセキレイ、ヤマガラ、オオジシギ、ツミなど、昨年12月から今年5月までに撮影した野鳥の写真15点を展示しています。主な撮影地は江別市、苫小牧市、伊達市です。

日 時 10月14日(金)まで開催

9:00~17:00 (土日祝は休み)

場 所 虻田入江簡易郵便局

(胆振管内洞爺湖町入江38-3)

◆2022年度 野鳥写真展 野幌でも開催◆



当会の野鳥写真展(19名37点)は、5月の「札幌エルプラザ」に引き続き6月1日から30日まで、江別市の野幌森林公園自然ふれあい交流館で開催しました。

出展写真は当会ホームページの「PhotoAlbum→WEB版写真展」で閲覧できます。

【新しく会員になられた方々】

河合千賀子 (札幌市中央区)

齊藤 蓮 (札幌市厚別区)

佐野 純子 (札幌市中央区)

鳥谷峰 修・由紀・心 (札幌市豊平区)

丸勢 文現・亜希子 (札幌市西区)

福富みどり (登別市)

匿名希望 1名

【北海道野鳥愛護会】 年会費 個人 2,000 円、家族 3,000 円(会計年度4月より)

郵便振替 02710-5-18287

〒003-0026 札幌市白石区本通1丁目南2-38 北海道自然保護協会気付 北海道野鳥愛護会 ☎(011)876-8546

HPのアドレス <https://aigokai.org>